

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350747

研究課題名(和文) 障害のあるトップアスリートの「個別性」を踏まえた包括的な心理サポート方略の構築

研究課題名(英文) Examination of Procedures of Comprehensive Psychological Support Based on Individuality among Elite Para-athletes

研究代表者

内田 若希(Uchida, Wakaki)

九州大学・人間環境学研究院・講師

研究者番号：30458111

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ハイレベルな競技スポーツは、アスリートのwell-beingや健康に対して、有害にも恩恵にもなり得る。心理的準備や心理的スキルトレーニングは、アスリートの心理的健康を改善するために重要である。そこで、本研究では、わが国の障害のあるトップアスリートの心理的競技能力と自己成長の指標である心理的well-beingの関連性、および心理的競技能力が心理的well-beingに与える影響性について検討を行うことを目的とした。また、インタビュー調査を通して、自己成長を促す心理サポートの方略について検討することとした。

研究成果の概要(英文)：Elite athletes must continually strive for success in highly competitive and stressful environments. High-level competitive athletics can therefore be either detrimental or beneficial for these athletes' well-being and health. Psychological preparation and psychological skills training are important for improving athletes' psychological health. The annual report from the Japanese Paralympic Committee shows that some coaches reported para-athletes needed a certain staying power under stressful situations and needed self-assessment abilities with regard to psychological factors. Coaches also strongly believed that psychological support could promote higher performance.

This study's primary aim was to investigate the relationship between the psychological competitive ability and psychological well-being of elite para-athletes. The secondary aim was to describe the procedures of psychological support for promoting self-development in para-athletes.

研究分野：障がい者スポーツ

キーワード：心理的競技能力 心理的well-being 自己成長

1. 研究開始当初の背景

心理サポートの必要性

健常者のトップアスリートの競技パフォーマンスの発揮において、技術や体力だけでなく心理的側面の重要性に目が向けられ、心理的競技能力を高める心理サポートのニーズが高まっている(荒井ら, 2005; 徳永, 1998)。同様に、障害のあるトップアスリートにおいても心理サポートは重要な意味をもつ(内田ら, 2007)。また、山崎ら(2007)は心理サポートの実践報告を行い、障害のあるアスリートの心理的側面に向き合っていく重要性を指摘している。しかしながら、障害のあるトップアスリートを対象とした心理サポートに関する研究は、わが国においてまだ未発達段階であることから、障害のあるトップアスリートを対象としたスポーツ心理学研究の促進が急務であるといえる。

アスリートの人間的成長への支援

Ryff (1989) によって提唱された心理的 well-being は、自己成長の指標として有効であり、人生に対する意味づけや方向性、目的に関する「人生における目的」、個人の信念に基づいて自己を評価する「自律性」、個人の能力や可能性に関連する「人格的成長」、自身を取り巻く環境の調整に関連する「環境制御力」、重要な他者との結びつきの深さに関する「積極的な他者関係」、および自己の短所も含めた受容の程度である「自己変容」の6次元で構成される。

アスリートにおける心理的 well-being に関しては、Lundqvist (2011) の提唱したモデルが参考になる。このモデルに鑑みると、アスリートに関連する心理的 well-being として、包括的な well-being である主観的 well-being (生活満足感など)、心理的 well-being (自己受容、他者とのポジティブな関わりなど)、および社会的 well-being (社会的受容、社会的実現化など) が位置づけられている。そして、その下位概念に、スポーツに関連する well-being が存在することが提唱されている。スポーツに関連する well-being も、包括的な well-being と同様に、スポーツ場面を考慮した主観的 well-being (競技満足感など)、心理的 well-being (アスリートとしての自己受容、コーチ・チームメイトとのポジティブな関わりなど)、および社会的 well-being (スポーツにおける社会的受容、スポーツを通じた社会的実現化など) が存在する。

このように、アスリートにとっての well-being を考えてみると、スポーツに特化した well-being というものが存在し、包括的な well-being のような自己成長を遂げるためには、欠かすことのできない概念だと考えることができる。

2. 研究の目的

本研究では、わが国の障害のあるトップアスリートの心理的競技能力と自己成長の指標である心理的 well-being の関連性、および

心理的競技能力が心理的 well-being に与える影響性について検討を行うことを目的とした。また、インタビュー調査を通して、自己成長を促す心理サポートの方略について検討することとした。なお、本研究は、九州大学研究倫理委員会の承認を受け実施した。

3. 研究の方法

3-1. 研究1の方法(量的アプローチ)

調査対象者

調査対象者は、障害のあるトップアスリート 103 名(平均年齢 33.6±10.01 歳、平均競技年数 12.3±6.97 年)であった。

質問項目

心理的競技能力診断検査(DIPCA.3)

スポーツ競技用の心理的スキル尺度として、徳永・橋本(1994)によって開発された心理的競技能力診断検査(DIPCA.3)を使用した。質問は52項目で、5因子12下位尺度から構成されている。本研究においては、各因子の影響力を検討するため、競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性の5因子の得点を用いることとした。

心理的 well-being 尺度(西田, 2000)

西田(2000)が作成した心理的 well-being 尺度を用いた。本尺度は、人格的成長、人生における目的、自立性、自己受容、環境制御力、および積極的な他者関係の6因子43項目で構成されている。本研究では、各因子得点の合計により算出される心理的 well-being (以下、PWB とする) 得点を用いた。

3-2. 研究2の方法(質的アプローチ)

20XX 年に開催された国際競技大会日本代表選手のうち、メダル獲得者および上位入賞者 20 名を対象に、半構造化インタビューを実施した。インタビューは、対象者の居住地や勤務地の最寄りの会議室などで実施した。インタビュー後、ICレコーダに録音されたインタビュー内容の逐語録を作成した。

4. 研究成果

DIPCA.3 と PWB の相関分析

DIPCA.3 と PWB の関連性を検討するために、相関分析を実施した(表1)。競技意欲や自信と PWB には強い正の相関が認められ、精神の安定・集中や作戦能力と PWB には、中程度の正の相関が認められ、協調性と PWB には弱い正の相関が認められた。これらのことから、DIPCA.3 と PWB の間には、DIPCA.3 の因子得点が高くなれば、PWB の得点が高くなることが明らかになった。つまり、DIPCA.3 と PWB にはすべての因子で正の関連性があることが明らかになった。

小澤・長田(2007)は、車椅子バスケットボール選手を対象に競技の意味を自由記述で調査し、「自分への挑戦や成長の手段」、「人生そのものあるいはその一部」といった回答が最も多いことを示した。このことは、車椅子バスケットボール選手にとってのバスケットボールは、精神的支えとしての意味を担

っている可能性を示唆している。つまり、競技に打ち込むことは、自己の成長と関係があることを意味している。本研究の対象者は、障害のあるトップアスリートであり、競技に対しては成長や挑戦を念頭におきながら打ち込んでいると考えられ、自身の向上を目指しているといえる。

DIPCA. 3 から PWB の重回帰分析

表1. DIPCA. 3とPWBの相関分析

	競技意欲	精神の安定・集中	自信	作戦能力	協調性	PWB	M	SD
競技意欲	-	.35***	.67***	.63***	.44***	.61***	65.5	9.15
精神の安定・集中		-	.62***	.56***	.22*	.48***	47.1	9.48
自信			-	.85***	.36***	.63***	28.8	6.67
作戦能力				-	.32**	.56***	27.8	7.22
協調性					-	.40***	16.6	3.61
PWB						-	198.9	24.63

***, $p < .001$; **, $p < .01$; *, $p < .05$

Lundqvist (2011) の提唱したモデルを参考に、スポーツで獲得した心理的競技能力が PWB に影響を与えるのではないかとという仮説を立て、DIPCA. 3 の因子得点を独立変数、PWB を従属変数とするステップワイズ重回帰分析を行った (表 2)。この結果、DIPCA. 3 の「競技意欲」および「自信」の因子において、正の影響力が確認された。

Uchida et al. (2015) は、デフアスリートを対象に、スポーツドラマチック体験が、自己受容、自己実現的態度、充実感、自己閉鎖性・人間不信、および自己表明・対人的積極性を予測することを示している。この Uchida et al. (2015) の研究で扱われている心理的要因には、PWB に含まれる内容のものも存在する。この研究から考えられることは、スポーツに関連する変数が PWB に影響力を持つ可能性を示唆しているということである。本研究の成果からも同様に、障害のあるトップアスリートは、日々のトレーニングの中で、競技意欲や自信を高めることによって、自己成長としての PWB を獲得していく過程を考えるとができる。

表2. ステップワイズ重回帰分析の結果

	B	SE B	β	
競技意欲	.93	.27	.35	**
自信	1.45	.37	.39	***
R^2			.46***	

従属変数：PWB ***, $p < .001$; **, $p < .01$
分析過程において、精神の安定・集中、作戦能力、協調性は除外された

自己成長を促す心理サポート

インタビューを通して得られたアスリートの語りのうち、競技場面での心理的な自己成長および日常場面での「その人自身」としての自己成長に関する内容を中心にまとめていく。

まず、競技場面におけるアスリートとしての心理的成長に関しては、積極的思考、多様な自己コントロール、自信、自立心、責任感、他者との人間関係の醸成、ロールモデルとしての認識、およびアサーティブなコミュニケーションの獲得に関する発話がみられた。そして、これらの競技場面での成長を日常生活場面に般化させている様子が伺えた。具体的には、競技場面以外での他者との人間関係の醸成、ライフイベントへのストレス対処、自己管理、日常場面での積極的思考や感情のコントロールなどが挙げられた。

コントロールなどが挙げられた。

また、世界観の拡大や障害者というレッテルからの脱却に言及したアスリートも存在した。障害者スポーツは、たとえ障害を有していても、自己の可能性は閉ざされていないことに気づくきっかけ (内田ら, 2008) や、自己の可能性を再発見し、自信や身体能力への気づきを導く場 (Blinde & McClung, 1997) として考えられている。本研究の対象者らの語りにみられるように、このような過程を支援する心理サポートが重要といえよう。

さらに、共同体感覚に関する発話も確認された。共同体感覚とは、人間が互いを思い合う感覚や、いま存在する時間や場所を大切にできる感覚のことである (モサク & マニアッチ, 2006)。このことは、対象者らの人間的成長の証でもあり、心理サポートの一方略として価値の高い視点であろう。

競技における勝敗は、アスリートにとって重要な意味をもつ一方で、それだけがスポーツの最終的な目標ではない。心理サポートにおいて、自己成長に寄与する包括的な支援のあり方を検討した本研究の価値は高い。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 24 件)

- 1) 荒井弘和・鈴木郁弥・飯田麻紗子: 大学生アスリートにおけるギャンブル行動およびその関連要因の調査. 保健の科学, 59, 2017 (印刷中)(査読有).
- 2) 内田若希: 障がい者の立場から考えるスポーツ—競技スポーツにおける心理サポート. 体育の科学, 67, 195-199, 2017 (査読無).
- 3) Uchida, W. & Hashimoto, K.: Dramatic Experiences in Sport and Psychological Well-Being in Elite Athletes with Acquired Physical Disability. Journal of Health Sciences, 39, 71-78, 2017 (査読無).
- 4) 齊藤茂・内田若希: 審判員の判定に関する心理学的考察—大学生サッカー選手を対象とした審判員の判定に関する印象調査—. 松本大学研究紀要, 67 (15), 37-49, 2017 (査読無).
- 5) Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S.: Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research, 3 (4), 12-24, 2017 (査読有).
- 6) 吉田明・大嶽真人・橋口泰一・坂本宗司・小坪昭仁: ラグビー競技の戦略的なパントキックに関する基礎的分析—ラグビーワールドカップ 2015 上位 4 カ国を対象として—. ラグビーフォーラム, 10, 21-28, 2017 (査読有).
- 7) 内田若希・橋本公雄: 援助行動と関連する社会的スキルの醸成に向けた大学体育授業経験に関する探索的検討. 体育学研究,

- 61 (2), 475-488, 2016 (査読有).
- 8) 内田若希: 今どき, 「ガッツ」のある若者たち: パラリンピックの選手たち. 児童心理学 12 月号, 71-75, 2016 (査読無).
 - 9) 小松智子・内田若希: 福祉職への就職意思に影響を与える要因の質的検討—相談援助実習を終了した大学生へのインタビュー調査を通して—. 日本保健福祉学会誌, 23 (1), 1-13, 2016 (査読有).
 - 10) 大平誠也・荒井弘和: 小学校体育授業に伴う一過性の感情の効果: 長期的な感情と身体活動セルフ・エフィカシーとの関連. 発育発達研究, 70, 27-35, 2016 (査読有).
 - 11) 佐野萌子・鈴木郁弥・佐野信・荒井弘和: 親が子どものスポーツ活動に参加することと地域におけるソーシャル・キャピタルとの関連—NPO 法人川崎市法政トマホークス倶楽部の事例—. 地域イノベーション, 8, 47-59, 2016 (査読無).
 - 12) 荒井孝行・鈴木郁弥・荒井弘和: スポーツチームにおける「問題児」とのコミュニケーション. 法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 11-15, 2016 (査読無).
 - 13) 鈴木尚幸・鈴木郁弥・荒井弘和: 集団で楽しむエンターテイメントへの参加行動の変容ステージと参加に関する意思決定のバランスとの関連. 法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 17-23, 2016 (査読無).
 - 14) 堀川杏奈・鈴木郁弥・荒井弘和: ボート競技における艇のパフォーマンス向上のための声かけ方略. 法政大学スポーツ研究センター紀要, 34, 25-33, 2016 (査読無).
 - 15) 山崎将幸・内田若希・荒井弘和・橋口泰一・吉田聡美: 障がいを持つトップアスリートの心理的競技能力と心理的 well-being の関係. アダプテッド・スポーツ科学, 14 (1), 25-32, 2016 (査読有).
 - 16) Uchida, W., Marsh, H., & Hashimoto, K.: Predictors and correlates of self-esteem in deaf athletes. *European Journal of Adapted Physical Activity*, 8 (1), 21-30, 2015 (査読有).
 - 17) Arai, H.: Outcome experiences for collective psychological performance among collegiate athletes. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69, 2015. 10.7752/jpes.2015.01011; (査読有)
 - 18) 山崎将幸: 格闘技における対戦相手分析のための映像分析. バイオメカニクス研究, 4, 101-105, 2015 (査読無).
 - 19) 山崎将幸: ジュニア選手に対するメンタルトレーニングの留意点—ジュニアバドミントン選手への実践から. メンタルトレーニングジャーナル, 9, 62-67, 2015 (査読無).
 - 20) 坂本宗司・大嶽真人・橋口泰一・伊佐野龍司・菅野慎太郎・橋口泰武: ブラインドサッカーのシュート角度および距離からみた攻撃スタイルについての基礎的分析—ロンドン 2012 パラリンピックを対象として—. バイオメディカル・ファジィ・システム学会誌, 17, 59-66, 2015 (査読有).
 - 21) 須崎康臣・山崎将幸・河津慶太・阪田俊介・池本雄基・高井真佐代・杉山佳生: 小学校期のジュニア選手に対するメンタルトレーニングの実践研究. *健康科学*, 37, 37-45, 2015 (査読無).
 - 22) 阪田俊介・山崎将幸・河津慶太・須崎康臣・池本雄基・高井真佐代・杉山佳生: ジュニアバドミントン選手を対象としたスポーツメンタルトレーニングの実施: ジュニア選手へ有効な方法論の考察. *健康科学*, 37, 47-56, 2015 (査読無).
 - 23) 橋口泰一・菅野慎太郎・鈴木典: 歯学部テニス選手を対象とした目標達成に向けたスポーツメンタルトレーニングの試み. *日大口腔科学*, 41, 110-118, 2015 (査読有).
 - 24) 山田快・荒井弘和・中澤史・川田裕次郎・上村明・北村薫・広沢正孝: スポーツチームの一体感と組織風土との関係性—コミュニケーションを起点とした一体感向上へのアプローチ方法の検討—. *スポーツ産業学研究*, 24, 113-128, 2014 (査読有).
- 〔学会発表〕(計 32 件)
- 1) 山崎将幸: ICT を用いた大学体育実技のパイロットスタディー初年時体育授業の主観的恩恵評価尺度 (PBS-FYPE) の変容からの検討. 第 5 回大学体育研究フォーラム・平成 28 年度九州地区大学体育連合春季研修会, 沖縄県青年会館 (沖縄県那覇市), 2017. 3. 14-15.
 - 2) 山崎将幸: ICT を用いた大学体育授業が学生のコミュニケーションスキルに与える影響. 九州スポーツ心理学会第 30 回記念大会, アクロス福岡 (福岡県福岡市), 2017. 3. 4-5.
 - 3) 橋口泰一: 弓型競技選手を対象にした成績にかかわる生理・心理的要因分析. 統計数理研共同研究集会, 統計数理研究所 (東京都立川市), 2016. 12. 9.
 - 4) 橋口泰一: 日本の視覚障害者スポーツにおけるコーチングの一事例. *International Sports Seminar for the Blind 2016*, Shanghai (中国), 2016. 11. 25.
 - 5) Hashiguchi, Y., Otake, M., Isano, R., Sakamoto, S., Kanno, S., & Yoshida, A.: Qualitative analysis on communication of goalkeeper in blind football. *The 2nd Asia-Pacific Conference on Coaching Science*, Shanghai (中国), 2016. 11. 13.
 - 6) Sakamoto, S., Otake, M., Hashiguchi, Y., Isano, R., Kanno, S., & Yoshida, A.: Fundamental analysis on positioning during offensive play with goal throw as a starting point in blind football. *The 2nd Asia-Pacific Conference on Coaching Science*, Shanghai (中国), 2016. 11. 13.
 - 7) 荒井弘和・鈴木郁弥: ギャンブルを行うアスリートはメンタルが強いのか? 日本ス

- スポーツ心理学会 43 回大会, 北星学園大学 (北海道札幌市), 2016. 11. 5-6.
- 8) 山崎将幸: オリンピックアスリートに対するモチベーションビデオの心理的効果. 日本スポーツ心理学会 43 回大会, 北星学園大学 (北海道札幌市), 2016. 11. 5-6.
 - 9) 伊藤真之助・蓑内豊・吉田聡美: リハビリテーション時, 修正した動作の永続性の検討. 日本スポーツ心理学会 43 回大会, 北星学園大学 (北海道札幌市), 2016. 11. 5-6.
 - 10) 内田若希: パラアスリートのスポーツキャリアの段階に応じた心理・社会的課題と支援方略の検討—受障時期による差異に着目して—. 日本体育学会第 67 回大会, 大阪体育大学 (大阪府泉南郡熊取町), 2016. 8. 24-26.
 - 11) 内田若希: 体育社会学シンポジウム「2020 東京オリンピック・パラリンピック後のスポーツ環境を考える」スポーツ環境を変革できる可能性と課題. 日本体育学会第 67 回大会, 大阪体育大学 (大阪府泉南郡熊取町), 2016. 8. 24-26.
 - 12) Uchida, W., Fukaya, H., & Yamamoto, K.: Experiences of career development and transition among elite para-athletes. European Congress of Adapted Physical Activity 2016, Olomouc (チェコ), 2016. 6. 15-17.
 - 13) 橋口泰一・大嶽真人・伊佐野龍司・坂本宗司・菅野慎太郎・吉田明: ブラインドサッカーにおけるドリブルをもちいた攻撃スタイルの基礎的分析—インチョン 2014 アジアパラ競技大会を対象として—. 日本コーチング学会第 27 回大会, 日本大学 (東京都), 2016. 3. 14-15.
 - 14) 坂本宗司・大嶽真人・橋口泰一・伊佐野龍司・菅野慎太郎・吉田明: ブラインドサッカーにおけるゴールスローを起点とした攻撃スタイルの基礎的分析—インチョン 2014 アジアパラ競技大会を対象として—. 日本コーチング学会第 27 回大会, 日本大学 (東京都), 2016. 3. 14-15.
 - 15) 内田若希: フリースタイル・グループディスカッション「自己 (セルフ) について語ろう」ダイバーシティの観点から. 第 29 回九州スポーツ心理学会, パークサイドビル (福岡県北九州市), 2016. 3. 5-6.
 - 16) 荒井弘和・鈴木郁弥: 大学生競技者を支えるメンタリングとは?—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて—. 日本スポーツ心理学会第 42 回大会, 九州共立大学 (福岡県北九州市), 2015. 11. 21-23.
 - 17) 吉田聡美・蓑内豊・伊藤真之助: 新旧対処法による動作修正の気づきに注目して—動きの中での動作修正—. 日本スポーツ心理学会第 42 回大会, 九州共立大学 (福岡県北九州市), 2015. 11. 21-23.
 - 18) Uchida, W., Yamazaki, M., Hashiguchi, Y., Arai, H., & Yoshida, S.: Examination of psychological well-being and athletic psychological skills among elite para-athletes. IPC's VISTA Conference 2015, Girona (スペイン), 2015. 10. 7-10.
 - 19) Yamazaki, M., Uchida, W., & Nakayama, M.: The case study of sports mental training for boccia athletes. IPC's VISTA Conference 2015, Girona (スペイン), 2015. 10. 7-10.
 - 20) 内田若希: シンポジウム「障害者スポーツの現状と推進への課題」アダプテッド・スポーツ科学への招待. 第 64 回九州体育・スポーツ学会, 佐賀大学 (佐賀県佐賀市), 2015. 9. 11-13.
 - 21) 荒井弘和・鈴木郁弥: 交際相手のいる大学生競技者は幸せか?—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて—. 日本健康心理学会第 28 回大会, 桜美林大学 (東京都町田市), 2015. 9. 5-6.
 - 22) 内田若希: 障害のあるトップアスリートにおける自己成長プロセスのナラティブ研究. 日本体育学会第 66 回大会, 国士舘大学 (東京都), 2015. 8. 25-27.
 - 23) 荒井弘和・鈴木郁弥: メンターの存在は大学生競技選手を幸せにする—スポーツ・ライフ・バランスの実現に向けて—. 日本体育学会第 66 回大会, 国士舘大学 (東京都), 2015. 8. 25-27.
 - 24) 内田若希: 中途身体障害のあるアスリートにおけるスポーツドラマチック体験と心理的 well-being との関連. 九州スポーツ心理学会第 28 回大会, 鹿児島市, 2015. 3. 7-8.
 - 25) 山崎将幸・河津慶太・須崎康臣・阪田俊介・池本雄基・高井真佐代: ジュニア選手への継続的なメンタルトレーニングの効果. 九州スポーツ心理学会第 28 回大会, かごしま県民交流センター (鹿児島県鹿児島市), 2015. 3. 7-8.
 - 26) 大嶽真人・橋口泰一・坂本宗司・伊佐野龍司・松崎英吾: インチョン 2014 アジアパラ競技大会におけるブラインドサッカーアジア強豪国の分析—中国代表の攻撃について—. 日本コーチング学会第 26 回大会, 大阪体育大学 (大阪府泉南郡熊取町), 2015. 3. 7.
 - 27) 泉健也・橋口泰一・大嶽真人・坂本宗司・伊佐野龍司・菅野慎太郎・松崎英吾: ブラインドサッカー日本選手権におけるシュート角度および距離からみた攻撃スタイルについての基礎的分析. 桜門体育学会平成 26 年度大会, 日本大学 (東京都), 2015. 1. 25.
 - 28) 坂本宗司・大嶽真人・橋口泰一・伊佐野龍司・菅野慎太郎: ブラインドサッカーのシュート角度および距離からみた攻撃スタイルについての基礎的分析—ロンドン 2012 パラリンピックを対象として—. バイオメディカル・ファジィ・システム学会第 27 回年次大会, 昭和大学 (東京都), 2014. 11. 16.
 - 29) Uchida, W.: Symposium “The present situation and challenge of psychological

- support for the Japanese para-athletes” psychological support for para-athletes. 7th International Congress of ASPASP, Tokyo (日本), 2014. 8. 7-10.
- 30) Yamazaki, M. & Sakata, S.: The effect of sports mental training on junior badminton athletes. 7th International Congress of ASPASP, Tokyo (日本), 2014. 8. 7-10.
- 31) Yoshida, S. & Minouchi, Y.: Examination of rapid correction of weightlifting techniques using old way/ new way focused on the stability of correction and psychological change. 7th International Congress of ASPASP, Tokyo (日本), 2014. 8. 7-10.
- 32) Yoshida, S. & Minouchi, Y.: Examination skill correction, focusing of identifying the differencing between erroneous and correct movements; Old way/ new way. 第1回アジア・太平洋コーチング学会, 北海道大宅(北海道札幌市), 2014. 6. 11-13.

〔図書〕(計 18 件)

- 1) 内田若希: パラリンピック. 高橋健夫・大築立志・本村清人・寒川恒夫・友添秀則・菊幸一・岡出美則(編著). 基礎から学ぶスポーツ概論改訂版. 大修館書店, p. 34, 2017.
- 2) 内田若希: コミュニケーション能力の評価. 日本スポーツ心理学会(編). スポーツメンタルトレーニング教本三訂版. 大修館書店, pp. 66-70, 2016.
- 3) 荒井弘和: 行動変容技法. 日本スポーツ心理学会(編). スポーツメンタルトレーニング教本三訂版. 大修館書店, pp. 78-82, 2016.
- 4) 荒井弘和・村上貴聡: 自信をつけるためのトレーニング. 日本スポーツ心理学会(編). スポーツメンタルトレーニング教本三訂版. 大修館書店, pp. 140-144, 2016.
- 5) 内田若希: パラアスリートおよびデファスリートに対する実践例. 日本スポーツ心理学会(編). スポーツメンタルトレーニング教本三訂版. 大修館書店, pp. 192-196, 2016.
- 6) 内田若希: 障害とは何か. 九州大学健康・スポーツ科学研究会(編). 実習で学ぶ健康・スポーツの科学改訂版. 大修館書店, pp. 40-41, 2016.
- 7) 内田若希: 運動継続と心理的恩恵. 九州大学健康・スポーツ科学研究会(編). 実習で学ぶ健康・スポーツの科学改訂版. 大修館書店, pp. 90-91, 2016.
- 8) 内田若希: レクリエーション活動の恩恵. 九州大学健康・スポーツ科学研究会(編). 実習で学ぶ健康・スポーツの科学改訂版. 大修館書店, pp. 92-93, 2016.
- 9) 内田若希: 運動・スポーツをとおした障がい受容の過程(心的過程)について学ぶ.(公財)日本障がい者スポーツ協会(編). 新版障がい者スポーツ指導教本. ぎょうせい, pp. 192-195, 2016.
- 10) 荒井弘和: 運動・スポーツの効果および運動・スポーツを実施するための支援を学ぶ.(公財)日本障がい者スポーツ協会(編). 新版障がい者スポーツ指導教本. ぎょうせい, pp. 195-197, 2016.
- 11) 蓑内豊・竹田唯史・吉田聡美: 集中力. 基礎から学ぶスポーツ心理学改訂版. 中西出版, pp. 47-62, 2016.
- 12) 蓑内豊・竹田唯史・吉田聡美: イメージトレーニング. 基礎から学ぶスポーツ心理学改訂版. 中西出版, pp. 64-88, 2016.
- 13) 蓑内豊・竹田唯史・吉田聡美: チームワークとチームビルディング. 基礎から学ぶスポーツ心理学改訂版. 中西出版, pp. 102-120, 2016.
- 14) 蓑内豊・竹田唯史・吉田聡美: 効果的なスポーツスキルの習得法. 基礎から学ぶスポーツ心理学改訂版. 中西出版, pp. 142-154, 2016.
- 15) 蓑内豊・竹田唯史・吉田聡美: メンタルサポートの実際. 基礎から学ぶスポーツ心理学改訂版. 中西出版, pp. 163-168, 2016.
- 16) 蓑内豊・竹田唯史・吉田聡美: スポーツ心理学キーワード. 基礎から学ぶスポーツ心理学改訂版. 中西出版, pp. 177-180, 2016.
- 17) 吉田聡美: 資格に役立つスポーツ心理学ワークブック改訂版. 中西出版, 2016.
- 18) 蓑内豊・吉田聡美: 都道府県における活動. 日本スポーツ心理学会(編). スポーツメンタルトレーニング教本三訂版. 大修館書店, pp. 241-242, 2016.

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
内田 若希 (Uchida, Wakaki)
九州大学・大学院人間環境学研究院・講師
研究者番号: 30458111
- (2) 研究分担者
荒井 弘和 (Arai, Hirokazu)
法政大学・文学部・准教授
研究者番号: 30419460
- (3) 研究分担者
橋口 泰一 (Hashiguchi, Yasukazu)
日本大学・松戸歯学部・准教授
研究者番号: 90434068
- (4) 研究分担者
山崎 将幸 (Yamazaki, Masayuki)
東亜大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 80567199
- (5) 研究分担者
吉田 聡美 (Yoshida, Satomi)
北翔大学・総合科学部・非常勤講師
研究者番号: 40599510